新著聞集　貳

へ 13
115
2

新著聞集

慈愛篇第二

鷄雄を烹をなげく

母燕雛を愛して雄を追

母猿子をうしなふて水に没す

窮民を賑し救ひ賞に値

無縁病を三十三所に行を

猿子親を療して人心を感哉す

宥免讒者先非を後悔す

曾門蹄巻 15 14 10 八 2

尾州幼君臣を顧す

慈君戦伐自他を回向す

身をすてし人を救ふ

鶏雄を烹となげく

越前の福井松本の藤屋といふ旅籠屋にて阿ス
夜飼おきし鶏の雄を殺し料理しあらる雌
にまかへ竈のまへに飛来りしを捕へて塒にて伺しせ
しお猶すく又よびおりてあまたしく鳴あるきこれ
見るものあはれひ雄をおもひあるやとて人ゝ忌おそれく
喰ばずしてありき

母燕雛を愛して雄を追

大坂道頓堀鍋屋道味といふ者の宅に燕乃巣を作

へ13 115 2

す三年にあたりし頃朝雄とやく巣を出しが
いづくにか尸をわかざりしかバかくてとらるゝとして猫に
とられしと四ッの雛ありしが母鳥漸くに養ひ育し
ある時或日一ッの雄燕いづくよりともなく来りて日ごと
に巣へよりつかんとせしかど母鳥いなむけしきにて
よせざりしが昨日いかゞなりけん漸く一所に成
たゞひとつ雛を養ひけるが母鳥の居ざる間に家
針をくはへ来りて子二羽に喫せて殺しける母鳥
このことをさとりけるにや險しく翼にて搏
て件の雄を追しまゝ残る雛を育ひし也 貞享
三年のことなり

母猿子をうしなふにて水に没す

信州下伊那郡殿島の百姓猿を親子飼ける或時
夫ハ野に出て妻ハ洗濯せんとて灰汁を焼熱一度
をわかし桶に湛へおきしに彼の子猿桶のふちを窺ひ
見けるが桶乃ふちにいたるに熱湯乃中におちいりて
死しけり親猿これをみて甚だ泣かなしみけるをいへ
夫帰りて汝が子を慕ハ不便なれど人乃所為なり

猿ハ是非なきことといかに座して教訓しけれど
親猿その儘鍋乃蓋をもち来て桶に蓋して帰り
ゆくすれども悟らぬものをとて教ゆれバや亭主
ハあまりに哀に覚へ今より後ハ毎かゝる事も止けり
餌までと云しハ恨しげに亥より子猿を抱きて
出行しを不審くおもひ跡より見おくりければ山
のふもとへハゆかで殿嶌河原にゆき橋乃半にいたりて
子を抱ながら身を投て死る畜類としてかく迄
子を慕ふ事ハ遣ひあるとて猿乃死しけるしぬ

聞人ごとに袖をぬらさぬハなかりし

窮民を賑し救ひ賞に値

備中國矢田村洪水して田畠悉く損亡せしかバ
百姓既に餓死に及ひぬ庄屋見るに堪かねて思ひ
て米穀の有限をとり出し各々に借與へ又藁餘
多かりしをもつて草履わらじなどを作らせて賑せしかバ
人々悦ひおへる事限りなし其のこと國司より御
湯浅民部を奉行として取々の困窮をたすけ給ひ
し村々より餓死助乃扶持をこひしもの數あり

ありし次第の中しに水にはまくはてられし矢田村
よりハ何乃願ひもせざりしが庄屋乃計ひとして小
百姓ハ成次第とおもひあるや不届乃事なりとて
いましく穿議したまひけれど只今はるのちへ
きハ本意にもあらぬ次第隠すべきことにも侍らざれバ
ありし有乃侭に云しかバ奉行手を拍驚きかゝる
めづらしき奇特乃ことはなきとてすなはち大守へ訴へ
ありしに感心斜ならぬ次第にして八木を賜り
けり大いに悦ぶ。終

無縁病を三十三所に祈る

大坂長堀中橋乃草履賣仁兵衛が店へ行脚乃
僧腰かけ茶を乞けれしかバ見るにくハなけれども
これへとて茶碗をすゝめけるに仁
兵衛が兄なりし市兵衛といふ者居合せて今日ハ
志乃日なればとて食しきを是ありて大きに相もてなし時
節いかゞをとひしに僧奇特乃ことなり行てたべん
とて伴ひもどりし僧のいはく亭主ハ眼乃わづらひ
やまひこの眼病ゆへいかで身体せはしき文も

すべきなりしかどあながちさりければまさしハ三十三所の
順礼をこゝろざすといへどもしかるに路銭もなくて妻
子のやしないもなく唯願ふのみにておもひなやみ
かなしと行きしバ叔しも笑止のことにおもひけるが
もし今行バ来年汝のかはりに順礼すべしと云
けれバいかゞせん誠しかりとよろこびしに明年
三月ハ来りて西国の順礼しけるにいかなるにや
市兵衛ハかなしさ身にあまりけるそ有りしが
歓喜の涙を流しつゝもなかなかにおもかげしかも元

より貧しき私なれバすべき様も侍らねバこれなん
親より傳へし守地藏尊にてたいせつに貴て
朝夕に施しまいらせんといひしが頓て襟かけに念
ずるに眼気しく出てゆきさめけれバ六月廿一日
ハ下向ありてそれより眼治しければ自盲て汝
いとおそろしかりけん様みて願ひてしかも佛力に
も叶でやあらんさればいかゞとおもひしかバ身体
もいよいよおとろへ妻子とも離別し弟が介抱なり
おりんもいとゞ心うかるべし吾ハ高野山西谷蓮華

院乃隠居にて侍り汝一人乃かりてもさ乃ミ難儀なり
とゆるしいざこよとて翌日同道して登山し
ありし元禄三年乃事なり見聞せし人々を
やさしきはありけるとかしハ僧をふ貴きひじりと
よそれりし侍すと人々感涙せし

猿子し親を療して人心を感哉す

信州下伊奈郡入野谷村乃者冬乃日猟に出不仕
合よく皈る在乃大木に大猿乃居たりしを見れ
究竟のありとて討ける夜に入宿につきぬ日

皮を剥ちんと凍てハ剥かたしとて圍爐裏乃上よ
釣おきぬ深更に目をさまし見れバ釣おき
し火影に隠れける猿不審しく見なりし
猿くうかくひけれバ子猿親乃腋下にとりつき
居たるが一匹つかみて火にあぶりて
あぶり親猿乃鉄炮疵をあぶりて先しやうるよう
哀にいぶりちやて甜いらすれど血一ツたたりて
くりかたしとて情きものをと先非を悔て翌日
頭て女房にいとまをこひて頭をそりて世をのか

れ一心不乱の念佛者となり諸國行脚に出
たちん

有免讒者先非を後悔す

戸川肥後守殿家来杦山茂右衛門といふもの
主人の悪事十三ヶ条公儀へ訴へしこの元悔こと
ねきすふく不届なりとて則茂右衛門を
主人に下されしかば家老の面々相儀して首を
刎んとしけるに主人すさめしゝいやそれには及ぶ
しとて許しおかれしかバ家中の者ども奥意を

かくて忿をおさへしそのゝち池田宮内殿へ身躰
すとて國使に茂右衛門来りしに憎き佞人とて
来りしと皆人にくみしは肥後守殿それをきこしめし
てよびよせ汝に久しく逢ぬ珍事なりつるか
よるな宮内殿に逢なぞそり会を云べきぞとてありし
ある茂右衛門頻に感涙にむせびわりなききゝ仕合
それ我あやまり至極仕りぬ生々世々をれがし
御厚恩なりとて悦しと也これを以おもふこころなが
おふてかくごなり秘伝や悔りてへのりよふべき也也と

殿にも劣らずよろこびあへりとかや

　尾州幼君臣を顧す

尾州中納言殿十一歳の御とき扈従と小坊主と
御目通にて何やきけんしまとせしを御覧ありて
御傍の石川圭左衛門を召て只今かくしてあそびしを見られ
百出せし大津主膳も自分の身ならで八百も
不調法のありけるにやと心憂かりしも何か
かく家無遠慮なる向後ゆかしの由仰られし
とありし御とき十四歳の御時庭にて菊の枝を折せし

と御覧して此者の事よりも油断するは心よく
候わりて庭鳥の後悔御気あきとめて庭菜の枝
を兎ありても角ありても分ちしがたし下人陸にて
何や持ちかけて後難救ひ給へ汝お所為也と人
世上にいふ庭うらむ今よりのち堅く停むべしと
仰られしとなり

　慈君戦伐自他を回向す

東照権現宮関ケ原御合戦の後にて旅僧を召れ
しかして此のたびの戦に殺さるる人を弔ふ浄土宗

れ所化なりしかバ則ち御所迄近く召れて
合戦の吉凶をとはせ玉へバどゝ貴させ給ふて
それ合ハ敵を偏に撓くは軽忽なりといへども得ぬ
時あらずてハ勝利なりがたしと答ふ重て問せらるゝハ
いかんが勝利を得るべき僧乃いはく御仏によりて
天下を治平にし萬民を安泰ならしめ神社
佛閣乃廃頽を興隆なされかく大悲の鎧を召
れて敵一人を討てハ佛敵神敵とて降伏せ
しめ給はゞ必ず勝利うたがひなしと示しけり

ときかれて大ひに御感ありてはやくこの儀を程み
かゝるにいざ出陣とて關ヶ原へ誘引し給ひ
自他の戦死の者を過去帳に載させられしく弔
ひ給ひし後三州大樹寺にて浄土相承五重血
脈等なほらず受得し給ひ称名六萬遍の日課
戦場にても尚怠りなく成りしとかや乃
僧ハ後に観智國師と申奉りし

身をすてゝ人を救ふ

永井信濃守殿江戸の屋しきにて家来傷害せ討

むかひ乃宮に去る夜にかの方入りし其夜ハ日まで
信濃なる忍びの者きゝつけて尋ける者人を討
取りしと出し奉りて使をつかハされしかバ他の
より先私にも報りやて答て熨斗目に麻上下
ちやくし例のかくりなり玄関より入り家老中にあひ
信国乃何がしも己方へまかりし他家よりまいり
たまハんにハ八幡も照覧しあれ出すべきとハ思へ
されバ左候てハ其東乃悪意をかえすに似より
去るにても武士乃一道立ける事ハなりがたし所詮

此者を待し出し自ハ髻を切て立退んとおもひ
きハめられけるより腹立にて候ハりしか疾こ人を
待かねれ召捕へを行しかバ頓て信濃守より
告しらせバ待かどをおもひ定めたまふ人ハ是非
に及びがたしそれまで候はりつる也他所にて
もし見付たらんにハ討捨べし其の方に於てハ
なにハおいぬかるべからず宜しくいハ心得たる者も
悦浅からずして地へおりしてかけ探

新著聞集

酬恩篇第三

犬嶮難を救ふ
蛇密符を傳ふ
活鼠金を奉す
猫舌を噉薨す
鶏を活して賞に値ふ

犬嶮難を救ふ

寛文三年ふ駿府乃在番ふ酒井伊豫守殿おはせし小屋より白犬のありしが常ふ豫州殿乃前より出るを小坊主ふ給てものを喰せさせけりある時豫州殿遠回りとてやまうめしいふ下さるまた小坊主も供をして坂いりしに過て谷へ落たりしよりいづくよりまいりしやらん件乃白犬走より帯乃むすびめを噬へ曳て岡へとさしあげて吠ければ各これを驚き引あげて助けてけり

蛇密符を傳ふ

上杉彈正大弼殿の家に静田彦兵衛といふ人ありし先祖なる時他行せしに童のあつまりて白蛇を殺さんとせしをぜにゝかへ求めて放ちやりぬそれ越後路にて夫婦娘を誘ひけるに兎なる所にて出むかひ今日ハ汝をたすけに来る此子が命を助なばかなふてといふて去りぬ不思議におもひつゝおもひよらずの外人たらしけるに全くおもひ侍りしは白蛇を助かりし恩へ報ぜんとて此子にくれたりしき此悦びに蛇の見入あらば障を除くすべし教へ奉ん此呪文とまもり袋に入てかけさせ給へ立所に験あるべし一子相傳にせよとて別れけりそれより今に家に伝へられ女の子をもてる人ハ件の符をこひ袋に入れかけさせ侍るなり

活鼠金を奉す

寛文六年の事なりしが江戸新両替町に香具屋九郎左衛門宅にて鼠あまたありて溢れけれど

零落して家来に散せよといひけれバ不便
なるものにおもひ助抜ちしその妻乃夢に児一人
来り告て曰く今ハ命たすかりかへりて汝へ酒一つきこし
めしけるにそれ金魚をさらへに出しさるを戴
食とおもひ目さめてちすかふ口に物乃ありしを
吐出しみれバ金子一歩ありこれハ奇特乃こ
となりとてそれよりゆかたなる宅にて八嵐を殺さ
ざりし

猫舌を噉艶す

大坂博労の内華山町鍛冶屋八兵衛が妻かきうに
いぶつびて死すべき旨わづきしに飼
おきし猫床乃ほとりを離ずありしが病人の日
頃ハ頓て死するなりなきけれバにそハ汝を可愛が
る人もなりしいげくへちりともおまへを口説しニバ
打きまてかいつに来りしが病人そらずく成
て望みるりに件乃猫腰乃跡につき一町ばかり
もしたひ追反しあれども害に成り舌をもて切て
死したりし貞享二年十月廿八日乃ことなりし

鶏をいだして賞にあふ

相馬出羽守殿家中冨田作兵衛在江戸にて二階
に住居せしが或夜寐たる夢に
美女一人来りて只今我ハ殺されし悔く清助方下
さぬへ何もはふハまこと有りともすまんといふと
おもへハ夢覚めぬ頓て起二階をおりて縁下の傍
何となく寄合鶏のかしら雌をもとめて云合せし
このバ扨ハ夢の告にて此地をほりし処かの夢を
ふる得し　此鳥初て賜れと強ちにも受日比谷

の我田へ放ちあるそば殿の御母公きこしめし
やさしきものなりとて作兵衛に樽肴を賜りし
其のちかゝりける事ともきこえて二百五
十石新恩を拝領せしハ寛文年中のことなり

新著聞集

報仇篇第四

猿怨恠をなす

殺害の僧子となりて家をおこしほろぼす

怨念たちまち巫女に附て敵を害す

験士を殺して後刑戮せらる

僧財を掠奪て一族悉く滅す

甥を殺して網を焼く

非理に奴を殺し二子狂病す

馬を詐て狂灸す
奴婢を禁獄し蛇に變て命を奪ふ
馬乃筋骨を傷て神前に血を見る
大蛇を殺害して後同日に灸す
羊を奪ひ股を截七代足を痛
虎皮牛を纏ひ牛の鳴をなして灸す
鼠指をくらひ痛む

猿恨恠をなす
櫛笥殿北山大原乃知行取ふて鉄炮を持大猿
乃子ありしを狙ひけるに猿おのれが膜を敷て
子を合せありしを打殺されしその日より心ひ
けしきにて瘧ふ悩まされけり常に来れる醫
師乃云へし様あり頓て豚を三せきへバさつきを
君の病ふハいかなる鍼を用ひるも立所に
験ありなんはくらハそれを求めよとしに取へ大原の
庄屋来りしうバ此方に漢方の鍼を取て悩しみせよ

と使をはなちけるが庄屋がいたく幸ひ人にたのまれ
て鍼をもち来りし急なる事にて先立れて奉
りしそこれ秘しけりと頓て醫師の教し随に
調て飲しませけるに熱甚盛になりて譫言を云
にとろしかりけれど追々醫師の許に人をやり
けるに漸く醫師も来りしかば鍼をぬかせてより
かくこそあれとすれく語る醫師おどろき其は此なる
江州の麓り日来ありし不思議使をして及ばし
承りてまほしかりし言者これと也不思議の事なり

いかにも故あるべしとて大原の人を集めて問せ
ければ庄屋此なるは京都より出たりとて云ふ是
ぞ若きおもてのぞて櫛笥殿の連枝にておはし
ける若王子僧正と六角の正仏院僧正と相共に
壇を荘りていのらせ給ふに壇の上に大猿一ツ
ありけるを僧正頓て引組壇より下にさけび
猿をおさへんとせられしに猿は逃て門外に
出るすく疵りしかば僧正も今は叶はいのりと
て壇を出られしけ附に参者息をつくけるとぞや

殺害の僧子ともいて家をわゝるほす
江戸にて有る家中の男子恩といふ者の子
年寄同宇卿博奕に誇れり夜に事てハ
妻娘なども思く作法みだりしき事なりしかバ
親ハ切腹子二人ハ千住にて首を刎られし親切
腹の用捨使にひとひまりて待る立へ中ゑてとき
すなり紙若子の有る有る商ひ挈て日来云がる
もしその所にて金たぬかすんば打てハ紙部屋に
来り泊りし有る時金子三百両餘り持来り今夜ハ

休合まくてを白京へ上るとて件の夜も同し床に
寝るりしが夜もしてわすひあるに此人を殺し
金をとりかりふまくにて件の信るハ快よからんと悪
念おこりしと出家といひ親しき友といひ士の似
合ざるすいそで是へきとも身をおそりも寝れ更に
寝かくて終了暁方より刺殺し死骸をふかく
隠し件の金をとりふりやまと不足なるしかバ
後よりハいそじくも支りしと打ゆくしすも作りし
そのへちち妻をむかへて八十郎産れしやいるや産屋

乃内にハ嬰てこそありしか乃聖にはすこしも違ハざ
りけり不思議なるは聖乃腰下にハほくろありし是
にハなきかとされど吾がやまよりねハ聖乃吾が子
に産れたるよりや怨しくおもひしのいかりしの
長しくちなりぬ今かくの憂目にあひ武士乃兵て
ありける終をとりしに是全く八千郎が科よりかハ
吾積悪今にて報ひ来れりなと懺悔し後
性を助けの便りにもちいりして証を顧ミし
させしなりけるかなしく一返乃回向たのむとあきさせ

まゐへいりきすてハ是をとむかきしまへかへらず邪
あらすしまふさ今これまてせよとて切腹せしと
あり猟

怨念忽ち巫女に附て敵を害す

江戸浩業乃氷乃山口浅父右衛門家来を非道に
殺されし霊魂主人に附祈りぬれは口ばしるま
ましは神子を招きよせて立させ祈りけるに
祈念最中に抜刃を立あかるはいなや其刀をぬいて
浅父右衛門を只一討に切殺しける則神子

評定所へ引出し穿議有しかバ神子
ハ日ごろ更にかはらず我女の身なれバ何の
遺恨もなき者をやめさんやと云ひしが
御せんさくに違ひなく責問にあひ神子ハ
難をのがれける

験士を殺して後刑戮せらる事

京八幡の橋本に麹屋なにがしといふ者ありて定家
しける山伏ある時来てかたりしハ多分しかじか
しかるも此のほか身をもちけりしに今度殺さる

祈禱をたのまれ布施に銀子二枚をおくりし其祝ひに
酒給りけれバ山伏大きに悦びてそれより珍重のまたなる
物ども振舞ければ肴をもつて数々ひとつ呑ありけり
山伏酔ふして寝入る所を刺殺してありけれバ
京へのぼらせける娘来り居て此ありさまを見て
親なれどもおそろしきわざするものかなと走りける
御頓て乱心して口ばしりけるハ情なや纏の金に我を
を殺す此恨み少しもはらさずしてかく汝安穏にハおくまじく
御しきりに口惜やと言ひ喚き給ひけるに親の

首に縄を付べきさまにみせしてさまも刺殺し川
へ流しける妻がいもく娘が布子ハ剥て流し
あるかとさぞよく云ひふらし遂らる流し死骸
を追りあ禍ありましてけるはかくいかも大勢人
せへ追つき盗の宿とせし科ふく磔に掛られ
たの時何と切りひろへあるやざんしの悪事
を懺悔してまり

僧賊に掠奪ひ一族悉く滅す

奥州菊田郡下河村の江尻惣右衛門といふ者於

こゝも何事をなかりし中に平四郎と云しを羽黒権現
の社僧長明寺へつかはされて隠意ありし中にも
まことが寺の金をとらんと扨平四郎に云含て手紙を
盗ませんより住持はかくともしらずして程経て金を返
さしと云ければ疾病ありとていふほどにて遂に
公事になりぬ守護の内藤帯刀殿の前にて
対決ありけるに附證文出せよと宣ひけれとも
元来証文なりしが出家の紛失のやうすにて
負になりて帰るうち小八幡の祠にて自害

のごとく此神前にて誓詞を書灰になし呑よ
呑んとすれば悲しや身の毛よだちおそれいなえ
かくして神水にて呑ぬ折それより里のはなしの
十王堂へ立よりて長明寺向畠二枚うちかけ堂内
にて投入れ悔なき冥途の證拠にとうち返し
誓ひ寺へ帰り口おしや我ハ損をしてねだりとられ
めおとにて面目をうしなふ上ハ活て
面をむくべきよふもなく死して恨をなすべしと
断食して空しくなりぬおそろしき悪たる者ハ天命に

家にて経読て後ゝも早廻月日廻りて父の僧の
三十三回忌すぎて子孫たちも尋ねては内ゑの
長明寺笠を被りて杖をつき来る所に身を縮
めて恐れながら経にて長明寺当住を招きて
祈念なしつる上又神子に頼ひ作せ申しかる
採ミの事を口ずしり亡不思議を立けるに長明寺の
あたり走りより汝ハ何の者ぞと我宗をなじれ又
へ弟子の身として祈祷ハ何事ぞ真言ハ此家
すハ来たるかなと師恩をわすれし供を先へ

穀さん疾くも此一族ことごとく滅さんとおもひし
かど富貴なりしも後蟹の足をもぐやうになりて
ひとりしげるは一入嘆も深かりしに子をもうしなひ今までは
許しゝ兄弟なりしを追有より穀さん平四郎ハながら
盗し科はあれどそれぞれ思慮をもちつりんぞとそり
むしれ好身也へ不便なりなれば世はきてふも科を
許すありがたきれど病身なりなしおくへしと
甚嗔り旬んおそろしきふ長明寺ハ新をやめて
外道へ生徹り此地はしきりて歿し去るよ拙たる

長右衛門ハ兵衛忠五郎兄弟四人同じ枕なり
し死しぬれバ後家子どもゝ皆追々に死ぬ
恵日寺の圓智ハ真言宗の名匠なれバこのために
七日の護摩を修せしより六日にあたる日檀那
死しあるとて夜かけて日數を合せて成就して
ゆかりの霊平四郎なり付そへハとく我宗となす
所なり圓智来て礙をなすべきよしいかの法師
頓て憂目なり逢せんとて旬所なり恵日寺なり
新しき卒都婆立なりしを其の梵字何者やらん

削り捨より円智に至迄かくの狼籍ハ俗人乃
すべきうちにあらざる山法乃浄土宗乃僧
その所為なるべし。それ使とせてあることハ以の
外乃無分別なる揺亟がくしてる護へ訴へあるを
寺社乃ことハ私ならずかくしもそれ江戸乃評定所
へかくし對決せられましし円智不届なりとて
追放せられしと円智おいそくる護乃浄土宗乃
まくしに見負かれし私負として大なる憤りを
江戸乃駒込にて隠し娚乃法師此の外大勢して

阿州乃帯刀殿を調伏しあり。此乃訴人有て
ほろめてま穿鑿乃上にて餘人ハ許され円智を
鍋坊主ともはじ護て下されま亀首せられし
此れを後乃れも合せハ皆られ長明寺お
食竜乃います所なり。揔一人お邪道は
く外災難乃人おかてあるよしをきかれ侍るハ
なるべし

娚を殺して細を焼

相州本目浦大工八郎兵衛といふ者の娚

悪人なりけれバいかにしけんしが終にあらはれて海
に沈め殺しけるハ延宝七年乃夏のことなりし
翌年乃夏妻男子を産取揚てみれバ額に角
ありて上下乃歯生ひちがひ其面かたち甥に似たりし
とおそろしくて細工乃道具箱を上より置て壓し
殺しけり且ハむごくしく持上しにや夫
と神子に梓にかけて問ひけるに魂を海へ流し
恨ふかくて子と産れ仇をなさんとせしかど幽く
殺されぬれバ力なし夫乃上ハ火難に逢すし

たゞひしがのちにくものごとく一所に網を
干かきしに紙束が網のまゝ俄に燃あがりて
せめ侍りしとかや

非理に奴を殺し二子狂病す

尾州遠山掃部といふ人毎年家来を召抱
成敗せられしものの数をしらず掃部二人乃子
ありし兄を甚之助弟を馬之助といふともに乱心
してありしとの護るに時ハ独言に我ハ何某なり何
なり何某ハ何某なりとていかにも無念しの辞して

侍るに命乃義をゆるし給ふ助命あられやとて
ふるまて八又眼をいからし悪き奴かな其まゝ
後まで乃ゟ云ひや何条おのれを助けんと云て
いゝと立て椽より頭をうちつぶしける
馬は絶死しけるを其のまゝにすておきけれバ又
りき以りて無罪にて身なき人を殺しけり
まず兄弟ともに同じかりしとなん

馬を詐て狂死す

松平阿波守殿馬をやしなはせんとて飼をしつけさせ
飼しみけるおし飼はきても苦しからじと
たらひいまだ飼侍すべしやけれど云ハ其れ馬を
責よとなふ臥しけるま其の馬わづらひて終に死ぬる
其のうち馬屋乃者狂氣して江戸にゆかりける八殿乃
おとをりとも飼をなじかは乗じてをや侍りしける
おのれ詐りしゆへかく病つきぬるなれどもまの恨
御ゆるしなりしと云て後わかりて狂ひ死ありけり

奴婢を禁獄し蛇に変して命を奪ふ

江戸久太郎町なり紺屋佐太郎といふ者ある夜

ぬす人を逢家内の穿鑿いたしけるに下女が
密夫を入夜来りしをしらべて奉行所へ訴へしに
御問糺ありける此男ハ佐久間町三丁目金兵衛と
いふものゝ方にわるものなる者
なりハ侍らぼとかくやたえて頑りぬ件乃女乃ミ
拷問ありかくて後らき責さびしくて重り煩ひ
しとなりて看病すへしや宣ひしかども佐太
が妻は汲乃ぎりを嗔罵り盗人なりと罵とハ此ゆゑ
死去ハ許さず合はずして終に篭死し

たりしを死骸をさげおくべしとや願ましかど
猶もきれるにいたりしかバ耳にも聞入ざりしを
此バ内獄司より帰り送りしが是れ比佐太郎が
妻にいひけりしが夜を行灯のもとへ来り蛇蟠まりし
そ此時ハ殊にあやしきと蛇を殺して捨
けれども又次の夜ハ来りて如何ともすべきやうなく
遂に扱しが終り身も疲れし死骸を沐浴
させんとて首に蛇の纏ひつきしを見付る
より身乃毛竪て憂なりければ家を出発心

修行乃身となりぬ

馬乃筋骨をゆるめて神前に血をそゝぐ

武蔵乃八王子千人衆頭原半左衛門殿になりし
馬乃尾筋前すじを切焼鉄を當るのを好まれし
けるが年乃元日より子息権十郎氏神へ社参せん
とて鳥居乃おもてにわれしおける諸乃馬の血や
また何ともいふものぞ神前まで漫りに参詣ハなさ
んとへ供乃侍どもいさむる宜ありや血ハ眼より
こへ縫ひすぢなくとも自ずから月にハ皆血にて踏所
なしとて鳥居乃外にてぬぐひつき萬より煩
ひつき馬乃ごとく真似をし七日より病さし死
亞きにありて云く無念や親乃よわりぬるをして
馬をいとしめたまふ罪障ハまさり報ひ畜生道に
堕するのみかしかもとて後悔せしまた其夜
なくしなりにき

大蛇を截害して後同日に死す

藤堂和泉守殿内若原伊豫といふ人乃家来甚平
といふもの伊勢乃賀間を舟にて通る時岩に當

ろくおりひしけり彯しくひゞきて大蛇動き出す
甚平すこしも駭ず刀をぬき大蛇の頭を討おとし
其長十三間ばかりしかば其のちハ跡より祟をなすと
いふ故實ばかりとて胴を三つにきり首と一所に
葬て弔ひしけり十三年めの同月同日同刻に
水をのむとて咽て死ありける其の怪なるかみ
ばかりあるにやはじめて蛇の此のへるべしとて人と
すくしはいへつゝもき
米を奪ひ股をきり七代足を病

関ケ原陣の三馬才三郎といふ人山伏の米裏を
もちて通りけるを兵粮乃ねさとて山伏の右の
高股を切ておひとし米を奪ひけるなれど山伏
太りに嘆て七代ハ恨をねさんとおめきて死ありき
然るはへきさ才三郎右の方投足なり隠居
して家督をゆづらせむ足なえりて家督乃子又
投足なりおのみへの今みしよりて同し牧野駿河守
殿家老となんすゞ仕へし
虎皮牛をはとし牛乃鳴をなしてし死す

江戸尾張町一町目乃扇子や牛乃子をもとめ
面より足まて虎乃皮にてぬひふくミ堺町乃
芝居へ出し大分乃わらひをとりしが此も
鳴せしが其口をぬひしゆゑ食物も断
て六七日過れど死ぬるを取かへし五六疋に
及べり其の比よりまかの者ども悉くはげしくて悩し
後にハひたすらに牛乃啼声をなして
死しとかや
擧指を嗽ほどむ

江戸小石川傳通院に利發といふ所化あり此僧
若年の時ある日申乃刻ばかりに鼠をとらへ
[illegible]し右乃手にて握殺けるに
[illegible]し指をくひて死せり當座に
[illegible]ぐ早速なほりてよくなり侍りしが
[illegible]り飽きたる比ハ件乃指痛く
お肉同しうなりかの鼠にいふ
まる最期乃一念にや凄まじき怖しき執
心なりと涙を流して語りし

江戸尾張町一町目乃扇子や牛乃子をもとめ
両より足まで虎乃皮にてぬいふくミ堺町乃
芝居へ出し大分乃わうらひをえたりしが然も
鳴せしが其口をぬいしめしけれバ食物を断
て六七日過れど死もやらず取かくし五六疋に
及べり其の児よりかの者わけはしらで悩し
後ハひたすらに牛乃啼声をして
死しとかん
鼻指を噉ひしとぞ

江戸小石川傳通院にて利発といふ所化ありし此僧
若年の時ある日の申乃刻ばかりに鼠をとらへ
んとて追まはし右乃手にて握殺けるに
鼠頭をかへし指をくらひて死けり當分に
すこし痛しかど早速なほりよくなり侍りしが
其のち日をへて鼬ちりしハ件乃指ふくれ
ねいるにて一生お為国しらずかの鼠にいた
まる最期乃一念にや恐ろしく怖しき事
んなりと涙を流して語りし